

立命館大学建設会

発行所
立命館大学建設会事務局
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部
都市システム系事務室内
令和6年8月

第38号

会長挨拶

建設会会長

川嶋 淳一

昭和五十四年生



私、昨年十月の建設会第二十二回総会において会長に就任いたしました川嶋です。微力ではございますが、本会の活動に尽力してまいりますので、ご支援・ご協力を賜りますようお願いいたします。また、会員の皆様には、平素より本会活動に對しまして、ご理解とご協力を賜っておりますことを心より厚くお礼申し上げます。今年度は新年早々能登半島地震が発生し、多くの方がお亡くなりになりました。謹んでお悔やみ申

耐震補強の効果により、橋梁本体には致命的な被害が出ず復旧の迅速化に寄与したとの話がある一方で、対策があまり進んでいなかった土工部で路盤崩壊や土砂崩落などが発生し、初期段階において十分に道路としての機能が發揮できなかったことから、災害時に確実に機能する道路ネットワークのあり方の検討や高強度土など土工部での減災対策の必要性等が指摘されています。いつ発生してもおかしくない大規模地震や、激甚化・頻発化する気象災害、インフラの老朽化などへの対策も待たなしの状態であり、今回の地震で得られた知見を活かし、より一層充実した形で防災・減災、国土強靱化の取り組みを推進していく必要があると思っております。

その一方で、建設を支える人材の不足や長時間労働が常態化しており、また、今年四月には時間外労働の罰則付き上限規制が適用され、さらに労働力不足が深刻化しています。このため、国等においては、生産性の向上を図るため、Total Working Time やインフラDXへの取り組みを推進されています。また、これらの分野においては、母校立命館大学が国内で先導的な役割を果たしておられることを心強く感じており、引き続き、けん引役を果たしていただけるよう期待しているところであります。会員の皆様も、各々の組織において生産性を向上させるため、現場の規模、状況等にマッチした適切な技術の選択や新技術の導入などに日々苦慮されておられるのではないかと思います。ただ、大変だと言っても立ち止まるわけにはいきません。今までの生産や働き方のモデルを見直し、若い人たちが将

来に夢と希望を持って仕事につけるような建設業界へと変えていくことが、今建設に携わっている者の務めであると思っております。会員皆様方のさらなるご奮闘を願っています。最後に、大学も、びわこ・くさつキャンパス開設から三十年を迎えるため、ウエルビーイングの実現に向けた新たな研究領域への挑戦を進めようと思っております。会員の皆様におかれましても、何でも変えればよいというものではありませんが、仕事だけでなく、私生活の部分においても変化を恐れず、常に挑戦する心を持って活躍されますことを祈念いたしますとともに、今後とも建設会のみならずの発展のためご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

びわこ・くさつキャンパス開設三十周年を迎えて

都市システム学系 学系長

野阪 克義



夫され、開設当時とは大きく様相が異なっています。最近BKCに入学されたことのない方は、一度BKCを見に来ていただければと思います。

学生の状況は、一見するとほぼコロナ禍以前に戻ったように見えるかと思えます。講義なども対面での実施が基本となり、学生の課外活動などについても制限がない状況かと思えます。一方、コロナ禍において実施されたオンライン・オンデマンド型講義についても一定認められており、対面実施と混在している状況です。学内会議においても、対面でも実施されるもの、継続してオンラインで実施されるもの、と分けられており、コロナ禍を経験したことによる変化は確実に残っています。

学生が大学院進学を希望している状況です。コロナ禍での学生生活を取り戻す、といった考えもあるかとは思いますが、学系内の教育・研究活動がさらに活発になるのではないかと期待しています。昨年度末に行われました卒業記念パーティーは、対面でも実施されましたが、コロナ禍における研究室単位での活動が定着した結果、希望者（希望研究室）のみの参加となり、かなり様変わりしたのではないかと思います。今年度の実施については未定ですが、卒業記念パーティーのような対面で交流できる機会の大切さも考えながら、学生間で意見交換してもらおう予定です。

二〇二四年度の学系長を務めております、環境都市工学系の野阪です。建設会の皆様におかれましては、日頃より都市システム学系における教育活動へのご協力、さらには同窓会の取組みへのご支援を賜りまして心より感謝申し上げます。

さて、我々都市システム学系が所属するびわこ・くさつキャンパス(BKC)は、二〇二四年四月に開設三十周年を迎えました。BKCが開設された二〇一四年四月、私は四回生としてBKCに通っていましたが、当時は理工学部のみであり、キャンパス内も非常に広大に感じたのを覚えています。現在では、理工学部・経済学部・スポーツ健康科学部・食マネジメント学部・生命科学部・薬学部の計六学部が設置されており、多くの学生が通っています。それにあわせて建物も増えており、植栽なども工

二〇二四年度になり、学系の教員体制にも動きがありました。二〇二三年三月には長谷川知子先生(環境都市工学系)と寶珍宏元先生(建築都市デザイン学系)が学系を離れました。二〇二四年四月からは、重富陽介先生、三浦陽

介先生、唐佳潔先生(環境都市工学系)、さらには岡崎輝一先生(建築都市デザイン学系)が着任されました。四月最初の会議は対面でも実施し、着任の挨拶をしていただきました。また、四月末に開催された学系の懇親会も対面でも実施し、学系の先生方や学系事務局・建設会事務局の方々が集まり、歓談する機会をもつことができました。オンライン会議では、着任された先生方の顔を見る機会はあるのですが、着任された先生方が学系の先生方の顔をみる機会は少ないと感じていたため、良い機会になったのではないかと思います。

今後は、コロナ禍が過ぎ、コロナ禍で培われた経験を活かしながらの教育活動になるかと思えます。教員一同、協力して教育活動に取り組んでいく所存ですので、建設会の皆様には今後とも学系の活動にご支援賜りますようお願い申し上げます。

私事ですが、私自身が立命館大学卒業生として、平成七年学部卒業、平成九年修士卒業、伊藤満教授の橋梁工学研究室の出身です。今回、先輩・後輩に届けられる建設会会報にて挨拶させていただく機会を得て、大変感慨深く感じております。

建設会が開設された二〇一四年四月、私は四回生としてBKCに通っていましたが、当時は理工学部のみであり、キャンパス内も非常に広大に感じたのを覚えています。現在では、理工学部・経済学部・スポーツ健康科学部・食マネジメント学部・生命科学部・薬学部の計六学部が設置されており、多くの学生が通っています。それにあわせて建物も増えており、植栽なども工

二〇二四年度になり、学系の教員体制にも動きがありました。二〇二三年三月には長谷川知子先生(環境都市工学系)と寶珍宏元先生(建築都市デザイン学系)が学系を離れました。二〇二四年四月からは、重富陽介先生、三浦陽

介先生、唐佳潔先生(環境都市工学系)、さらには岡崎輝一先生(建築都市デザイン学系)が着任されました。四月最初の会議は対面でも実施し、着任の挨拶をしていただきました。また、四月末に開催された学系の懇親会も対面でも実施し、学系の先生方や学系事務局・建設会事務局の方々が集まり、歓談する機会をもつことができました。オンライン会議では、着任された先生方の顔を見る機会はあるのですが、着任された先生方が学系の先生方の顔をみる機会は少ないと感じていたため、良い機会になったのではないかと思います。

今後は、コロナ禍が過ぎ、コロナ禍で培われた経験を活かしながらの教育活動になるかと思えます。教員一同、協力して教育活動に取り組んでいく所存ですので、建設会の皆様には今後とも学系の活動にご支援賜りますようお願い申し上げます。

会員の声

いま、思うこと



関東建設会
山元 明
昭和五十八年卒

大学を卒業して四十年が経過しました。あつという間であり、ある面では長い道のりでもありました。この間の世の中の足跡をちょっと辿ってみましょう。

まず、私が生まれた頃の産業界は、一九六〇年代には重厚長大な鉄鋼産業界が国家の象徴とされ、それを重さで表現すると「トン」でした。その後、家電製品の需要が高まり、「キロ」のものが注目されました。さらに、パソコンの導入期には集積回路や半導体などの「グラム」のものがもてはやされました。そして今や、テクノロジーはICTの普及によりクラウドやサイバー空間への移行で、もう重さの意味を持たなくなりました。このような進歩は、私たちの生活やビジネスに大きな影響を与えています。

人化や効率化は急速に進展しています。さらに直近ではICTの活用や働き方改革により、業界は劇的に変化しています。若いころ、天候に悩まされる現場作業のさなか、よく耳にした諺がありました。「土方ころすに刃物はいらぬ、雨が三日も降ればよい」。天候に左右されやすい屋外作業では、降雨による工程の遅延は大きな損失です。しかし、悪天候によるロスを抑えた工程変更は、機転を利かせ工程管理をする現場監督の腕の見せどころでもあり、連日の作業で疲れた身体を癒す休養日にあてるいい機会でもありました。

またこんな諺もあります。「夜明けの雨でかさをぬぐ」。仕事にかかる朝のうちは土砂降りだが、雲の動きや気温の変化を考えると、しばらくすれば雨は上がり、案外今日は仕事日和となるでしょう。

これらの事象への対応には、五感を働かせ、普段の業務の性質や自然条件を熟知した上での的確な判断力が必要です。いわゆる知恵や機転をきかせた経験工学です。これからますます少子高齢化が進行し、技術者、技能者が減少していく中、新たな技術革新は大きい望ましいことです。しかし人の手を介する作業もまだまだたくさんあります。一方、予期せぬことが起きることのほうが多いのが現実の世界です。効率化の追求だけではなく、感性や想像力を働かせる暗黙的なスキルを伝承していくことの大切さをあらためて感じるところです。

最後に、私が関東建設会に参加して十七年ほどになります。最初はこわそうな先輩方の輪の中にはいることすら躊躇しましたが、そこはフランクな語らいの場でありました。同窓生との交流を大切に、意見を共有することは必ずや自身の将来への良き財産になると思います。今後は若手の寄り付きにくさを改善するために何か形を変えていくことが求められているかもしれません。しかし先ずは、「若者よ足を運んでくれ!!」

最後に、私が関東建設会に参加して十七年ほどになります。最初はこわそうな先輩方の輪の中にはいることすら躊躇しましたが、そこはフランクな語らいの場でありました。同窓生との交流を大切に、意見を共有することは必ずや自身の将来への良き財産になると思います。今後は若手の寄り付きにくさを改善するために何か形を変えていくことが求められているかもしれません。しかし先ずは、「若者よ足を運んでくれ!!」

卒業から四十年



建立会副会長
坂口昭久
昭和五十九年卒

私は一九八四年卒業で建立会副会長の坂口と申します。学生時代は片道二時間半をかけて四年間笠まで通学しておりました。家と学校の往復生活を四年間続け、授業が終われば帰宅するというのが殆どでした。

四回生でRC構造研究室に所属し、研究テーマの実験が梁の疲労試験だったことから、夜中の計測があり、研究室に泊まり込むことが増えました。研究室には日々受け継がれたベッドと布団があり、余り綺麗とは言えない布団でしたが、楽しい思い出となっています。学生時代の思い出としてはアルバイトもその一つだと思います。通学に時間がかかった関係上、春夏・冬休みの時だけでした。一番心に残っているのは、二回生と三回生の夏に若狭高浜の民宿に泊まり込みで手伝いに行ったことです。朝から晩まで風呂掃除、客室の掃除、料理の準備から各部屋までの運搬、布団敷き等忙しかつたのですが、大変社会勉強になりました。卒業後も毎年民宿に顔を出し、子供が小学生の間は家族旅行の定番となりました。

卒業後は道路会社に就職しました。一年目はアスファルト合材工場の試験室に配属となり、アスファルト混合物の配合設計書作成、各種室内試験、現場での品質管理試験を学びました。この一年間の経験は、後々現場での品質管理に非常に役に立ちました。二年目からは現場配属となり、東京八王子から現場人生が始まりました。国道の維持工事や管路埋設跡の舗装復旧工事に携わりました。特に舗装復旧工事では毎日夜勤で、当時は土曜日仕事で、夜勤明けの日曜日は寝るだけ、月曜日から出勤という繰り返しでした。辛いとは思いましたが続けられたのは、やはりこの仕事が好きだったんでしょうね。

平成元年に地元大阪へ転勤となり、国交省等の官庁工事を中心に、グループ会社の建築外構工事等に従事しました。段々と規模の大きな工事を任せてもらえる様になり、平成五年(入社十年目)には、初めて現場代理人として舗装修繕工事に携わりました。その後十年程、国交省を中心に現場代理人として現場を経験し、多くの試験がありました。成長することが出来ました。

四十五歳で支店内勤職に変わり時間的余裕も出来、建立会の幹事として参加させていただくようになったのはこの頃だったと記憶しています。諸先輩方や後輩との繋がりが出来たことで、道路業界以外の色々なお話を伺ったり、アドバイスをいただいたりと楽しい場となっていました。

令和三年に東京へ転勤となりましたが、東京では関東建設会にも参加させていただき、横の繋がりが広がっています。立命館大学建設会は素晴らしいなとつくづく感じています。今では総会で校歌やグレイター立命を皆で歌うことが楽しみの一つとなっています。若い人たちにどんどん参加してもらい、益々発展するよう微力ながら頑張りたいと思います。

京都建設会副会長、昭和六十二年卒業の谷口一朗です。同級生の多くが京都府に就職する中、私自身も卒業と同時に京都府に就職し、昨年三月末で何とか無事に三十七年間の市役所人生に終止符を打つことができました。市役所時代の若い頃は、土木技術職が比較的少ない(必然的に学校の先輩や後輩も)都市計画局の勤務が長く続き、学校の諸先輩からのプレッシャーも少ないことから建設会の行事も欠席が多く、非常に不義理だったと今更ながら反省しています。

学校繋がりの大切さを痛感



京都建設会副会長
谷口一朗
昭和六十二年卒

このまま都市計画局で骨を埋めるものと思いついていた四十代半ば、突如建設局に異動となり、ここから本格的に建設会とお付き合いが始まりました。土木職としては本流の建設局ではありませんが、私自身、土木職関係では市役所内にそんなに知り合いも多くなく、ましてや業界や京都府に人脈がある訳が無い、こんな中での建設局でのスタートとなりました。

その後、市役所内での円滑な業務、また業界や京都府との円滑なお付き合い、これを支えてくれたのが建設会での人間関係でした。特に、ラスト二年間は、思いもよらず建設局長という大役を仰せつかり、私に本当にこんな役が務まるのか?という思いでいっぱいだったのですが、市役所内外の多くの学校の先輩後輩の皆さんに支えて頂き、何とか職を全うすることができました。多分、他の学校の出身であれば、心身共に持たなかったのではと思っています。

そういう意味では、学校繋がりの周りの皆さんに感謝、感謝です。また、市役所を退職し、一般財団法人京都市都市整備公社に再就職させていただいたのですが、ここでも当時理事長が学校の先輩であり、続けて学校繋がりに支えられる日々が続きました。

この七月から前理事長を引き継ぎ、新理事長として業務にあたりておりますが、これからのこの学校繋がりを大切に、公社の発展に、また京都のまちの発展に少しでも寄与できるようがんばっていききたいと思っています。

今の時代、なかなか人間関係づくりが難しくなってきたり、ある意味「飲んで...飲んで...」の歌ではないですが、コミュニケーションの取り方がわかりやすかつたように思いますが、今はなかなか難しいですね。ただ、時代は変わっても、何かトラブルが起こった際や、大きな課題を乗り越えようと思うと、やはり人間関係が結構構になる場合がよくあります。今の若い方が私

淡路島を訪ね阪神・淡路大震災を思う



広島県支部
藤田明彦
昭和六十二年卒

四月の初めに子供の春休みを利用して淡路島に旅行をしてきました。一番の目的は阪神・淡路大震災で地震の状況を保存してある北淡震災記念公園にある野島断層保存館を訪れる事でした。今年(令和六年)は正月元旦から能登半島で震度七の巨大地震が発生し現在もまだ復興半ばとゆう状況が続いています。

私が衣笠の地から社会に羽ばたいた昭和六十一年から、平成七年の阪神・淡路大震災、平成二十三年の東日本大震災、平成二十八年の熊本地震と震度七クラスの大地震が発生しており、今年の正月で四回目の大地震になります。今後予想される南海トラフ地震がどのような被害をもたらすものなのかと危惧するばかりです。

阪神・淡路大震災の時に阪神高速道路が倒壊している画像をテレビで見ると自然の力の前では人間の力など微々たる物だと感じた事が昨日のように思い出されます。その当時、私は土木の技術者としてゼネコンでの施工管理を行ってました。当時の構造計算で地震荷重の計算では水平力については検討していましたが鉛直力については直下型の地震を想定したものは重要視していなかったように記憶しています。今回の淡路島の訪問で野島断層保存館で断層を引き裂く地震の力

と、前回訪問した時に地震体験で震度七の地震体験を子供にさせておきたいと思っていました。

今回、保存館を訪ねてみて以前と比べて訪れる人の少なさに驚きました。また施設のサビれかたが酷く、併せて地震体験も昨年の十二月で終了していました。阪神・淡路大震災も来年で三十年となります。

決して風化させてはならない事です。大地震が頻繁に発生する事を踏まえても大切に災害について伝え、考える教訓としても守っていくことが必要だと感じました。

今後、阪神・淡路大震災に限らず、豪雨災害や天災などの被害や被災者の声を現在のデジタルな保存方法を活用することで、将来への伝承方法として今後に生かしていきたいのではないかと思います。

三十七年を振り返って



岐阜県建設会 高木誠一 昭和六十三年卒

昭和六十三年三月に理工学部土木工学科を卒業し、三十七年が経ち、今年還暦を迎えました。振り返ると、楽しかった四年間の学生生活が昨日の事のように鮮明に思い出されます。

当時の大学は自由な発想と創造力を育む校風で、衣笠キャンパス内は自由に伸び伸びとした感性の学生で満ち溢れていました。なかでもクラスメイトには大変恵まれ、各地から集まった彼らからは大変刺激を受けることが多く、自分の知識が豊かになり、自身のレベルも向上させることができました。現在の私のライフスタイルは大学時代に培われたものだと思えて感えています。今でも大学には大変感謝しています。京都は私の第二の故郷です。

このような学生生活を送ってきた私は、大学卒業後、地方公務員(町役場勤務)のち市町村合併により市役所勤務として地元で就職しましたが、市役所の仕事は自由と創造に満ちた仕事とは言えず、法令、

条例、規則などの型にはまった事が多く、自由な判断を求められる事が少なく感じました。大学で何を学んできたのか、何か役に立つ事はあるのかと自問自答しながら公務員としての在り方を模索する新人職員時代でした。市役所の業務は多種多様で、採用当初は土木設計や上下水道関係が主業務である建設関連部署への配属でしたが、

その後は、教育、広報、企画、総務、財政業務などと建設関係の分野とはまったく違う部署への異動もありました。それでも与えられた業務の中から自由な発想や創造を見出すよう前向きに仕事に取り組んできました。理工学部を卒業した私がなぜこのような畑違いの業務を担当しなくてはいけないのかと疑問を持ち続けた時期もありましたが、振り返ってみれば、後々それが自分自身の知識や経験値を広げてくれて、仕事を続けていく過程において大きな自信と力に変えて行ってくれました。様々な分野の方々と多くの出会いがあり、人としての感性をも高めてもらうことが出来たと感謝しています。

今年、還暦を迎えましたが、今後まだまだ新しい事に挑戦し経験を広げ、豊かな人生を送りたいと感じている今日このごろです。

最近では、学生時代によくバイクに乗って京都市内や周山街道を走り回っていた頃を思い出して、バイクを購入し十人程の仲間と一緒にツーリングに出かけ楽しんでます。色々な所に出かけるのにも新鮮で気分がリフレッシュされます。

市役所の中には校友も多く、尽心会という名称の校友会が存在します。コロナ禍以前は懇親会を開催したり、京都へ旅行に行くなどと定期的に交流をしていましたが、現在は活動を停止している状況です。岐阜県建設会には、平成二十年度から参加させていただいていますが、最近の仕事が忙しくて出席できていません。会員の皆様とお会いする機会がなかなかございませんが、引き続きご指導頂きますようお願い申し上げます。最後にありますが、立命館大学建設会の益々のご繁栄と、皆様方

憧れの橋



和歌山県支部 小林香木 平成十一年卒

和歌山マリナーシティ。和歌山市毛見沖に浮かぶ人工島であり、平成六年四月に埋立完了、同年七月から九月まで世界リゾート博覧会が開催され、地方博としては異例の二九〇万人が訪れた島で、現在はホテルや温泉、市場、マリナー施設などがあり、年間の入島者数は二〇〇〇三〇〇万人(令和五年四月和歌山県の人口は約九〇万人弱)と、和歌山における一大リゾート拠点となっている。

リゾート博が行われた当時の私は高校を卒業し、大学を目指してひたすら勉学に励む浪人生であったが、この和歌山の盛り上がりに加わらなければと、リゾート博会場に足繫く通った記憶がある。マリナーシティに行くには、和歌山市側に「サンブリッジ」、海南市側に「ムーンブリッジ」と、二本の橋梁がある。サンブリッジは橋長四一〇mの鋼二径間連続斜張橋であり、ムーンブリッジは橋長二七九・七五mの鋼三径間連続補剛アーチ橋だ。どちらもデザイン性があり、カッコいい橋だと思っていた。高校生の頃には土木の道に進みたいと思っていたので、このような橋が和歌山にあることもうれしく、また、このような橋に携われる仕事ができればなと、漠然と思っていた。

翌年、めでたく立命館大学理工学部土木工学科に入学することができ、橋への想いを胸に抱きながら勉学にはげみ大学院に進学、そして平成十三年、和歌山県庁で働くこととなった。そこから月日は流れて令和四年四月、人事異動により現在の職場である和歌山下津港湾事務所配属された。ここで、あのサンブリッジおよびムーンブリッジの耐震補強工事に携わることとなった。(臨港道路のため港湾

事務所管理なのです)ここで少し、今年度から工事着手したサンブリッジの耐震補強工事について紹介する。この橋は少人数で、両桁端部の道路線形が曲線であること、不等径間であるため短径間側支承の負反力対策として、短径間の桁内にカウンターウエイトとなるコンクリートが充填されていること、短径間側の最上段ケールが桁でなく橋台に定着されているため、常時において主塔部や橋台の支承に常に水平力が作用していることなど、他にもいろいろの特徴(問題?)を有している。補強内容は変形抑制のための粘性ダンパー設置や主塔への座屈拘束ブレースの設置、橋脚のコンクリート巻立補強など一般的な対策が主であるが、先述の特徴のため工事が思うように進まないこともあり、大変苦労している。かっこいいと思った橋であるが、今はなぜこんな複雑な形状なのかと少し怒りが込み上げてくる。今後、新しい橋の計画に携わることがあれば、絶対にシンプルな構造にしようと思おう。とは言え、憧れ抱いた橋の補強工事なので、やりがいを感じながら工事を進めていき、この先何十年と現役でその存在感を示す橋であり続けてほしいと思う。

皆様もインフラの整備において様々な苦労をされておられると思いますが、共に頑張つて、乗り越えていければと思っています。そして、より住みよい素敵な社会となることを祈念して。ありがとうございました。

赤い味噌汁の衝撃



北海道支部 渡邊一慶 平成十三年卒

「立命館大学に決めた！」私が初めてびわこ・くさつキャンパスの噴水を見た時の感想です。一目惚れでございました。

北海道根室市という辺境の地で建設業を営んでいます。平成十五年理工学研究科を修了しました渡

邊です。修了後、約三十年が経ちますが、当時のことがはつきりと思い出されます。

私が、大学入試を経験した当時は、センター試験の成績だけで入学できる入試方式がありました。北海道にいながらにして試験を受けることができたので、大学の所在地を知る由もなく、京都から入学者内が居いてびっくりしたことを覚えています。「えっ、立命館大学って東京にあるんじゃないの?」といった具合です(笑)。私の両親はもともと驚いていました。「あんた、関西の大学に行く気なの?」と猛反対です。現在では、札幌市に立命館慶祥高校ができましたので、北海道での知名度は抜群ですが、当時は受験生の私でもその程度でした。

「とりあえず、行ってみよう。」と思いつき、釧路空港から関西空港まで飛行機で向かい、南草津の駅前に降り立ちました。あたり一面田んぼに囲まれており、遠く離れたところにはポツンとパチンコ屋さんがあったことを鮮明に記憶しています。「こんなところに大学?」と疑問暗鬼でバスに乗り込みキャンパスに向かいました。そこにきらきらした「噴水」が目の前に飛び込んできたのです。私が想像していたテレビドラマの中のような、まぶしいキャンパスライフが想像されました。「俺、ここに通うかとを覚えていてます。」

私の見込んだ通り、キャンパスライフはきらきらしたものとなりました。北海道の海、とりわけ道東の海には「泳ぐ」という概念がありません。そもそも、海水温が低く、夏でも海に落ちると命を落としかねません。そのため、海で泳ぐということが漠然としたあこがれがありました。海ではありませんでしたが、琵琶湖で泳ぐことのできるサークルに入りました。また、冬には、山間部でスキー、ボードが楽しめる、夏と冬のスポーツが堪能できる場所に魅力を感じていました。

「冷たい空気が出るの?」道東では基本的にクーラーは使いません。扇風機で十分です。冷房の使い方がわからず、部屋で熱中症になりかけていた私を友達が救ってくれたことを覚えています。

「まっ、ええか。なんとかなるやろ。」のような「関西気質」にも大変感銘を受けました。私の友達限定かもしれないが(笑)。そこで、失敗をしても気にせず前に進む、というような気持ちの切替え方を教わったような気がしています。

「ここに骨を埋めよう」六年間生活した結論でした。就職活動でも関西のゼネコンを選びました。しかし、現実は厳しく、就職後すぐに東京支社に配属になり、関西を離れることになりました。その後、関西に戻ることを夢見ながら、トネル現場をいくつも渡り歩き、最後は北海道白糠町の現場に配属になりました。そこで、関西に戻ることを選びました。実家に戻ることを決意しました。地元友達に「サケの回遊みたいなことしてるな」と言われています(笑)。

立命館大学の六年間は私の人生観を大きく変えるものとなりました。私にも小学四年生と小学二年生の子供がいますが、一度は関西に住んでもらいたいという思いです。最後に大学院時代に大変お世話になりました、深川良一教授、小林泰三教授にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

着任の挨拶



環境都市工学科 講師 三浦陽介

今年の四月より、環境都市工学科でお世話になることとなりました。三浦陽介と申します。

私の名前と顔写真を見て、気付いた方もいらっしゃるかもしれませんが、私は二〇〇四年に立命館大学理

工学部環境システム工学科を卒業後、二〇〇六年に同大学大学院の博士前期課程を修了しました。当時の指導教官は現在も環境都市工学科にいらっしゃる市木敦之教授です。修士修了後、民間の建設コンサルタント会社に就職し、そこでは、河川の洪水防衛計画、下水道計画、都市域感潮河川の水質改善計画、水循環・地下水解析など、多岐に渡る水に関する業務に携わらせて頂きました。そんな中、少し会社の仕事内容に新しさを感じなくなっていた折、新たな挑戦として、博士号を取得しようと、東京大学生産技術研究所の芳村圭教授を訪ね、お話をさせて頂く中で、研究が面白そうだったので、これに専念するために会社を退職しました。そして、二〇二〇年に東京大学大学院工学研究科社会基盤学専攻の博士後期課程を修了し、博士(工学)を取得しました。その後は、一般財団法人気象業務支援センターの研究員として、気象庁気象研究所にて勤務、さらに東京大学生産技術研究所の研究員を経て、現在に至ります。

ここまで読んで頂いた方の中には、何も会社を辞める必要はないのではと疑問に思われた方もいらっしゃると思います。当時の私も会社を辞めるつもりはなく、社会人ドクターとして入学する予定でした。芳村先生は全球を対象とした研究をされています。当時の私は全球のことなど、何も考えていませんでした。自分のキャリアという全球から見るとちっぽけなことを考えていました。そして、芳村先生と話し、地下水をテーマにすることが決まり、既往研究を調べていくうちに、水平方向の地下水流動が気候に影響を与えている可能性があることを知り、驚いたことを今でも覚えています。これまでの気候や気候変動を予測するモデルには、鉛直方向の地下水流動しか扱ってきませんでした。水平方向の地下水流動が気候変動予測の結果を大きく変える可能性に魅了され、会社を退職し、研究に専念することにしました。

この四月より、環境都市工学科の特任助教として着任いたしました唐佳潔(タンジアジェ)と申します。私は日本の佐賀県で生まれ、中国の杭州で育ちました。幼少期から土木工学の魅力に惹かれ、高校卒業後、日本への留学を決意しました。

私は九州大学の土木国際コースで基礎的な土木や環境工学に関する知識を学びました(指導教員・久場隆広教授)。その後、京都大学で環境地盤に関する修士課程を修了しました(指導教員・勝見武教授)。さらに、国立環境研究所で物質溶出についての研究を深めました(受け入れ研究者・肴倉宏史室長)。博士課程中は日本学術振興会特別研究員の支援を受けて、昨年九月には、京都大学地球環境学堂から自然由来の汚染土壌に関する重金属溶出の長期評価システム構築について、博士号を取得しました(指導教員・勝見武教授)。

長い学生生活を終え、今年四月に立命館地盤システム工学研究室に所属し、小林泰三先生のもとで、教員として新たなステップを踏



環境都市工学科
特任助教
唐 佳潔

着任の挨拶

動モデルを開発し、粗い格子でも表現力を落とさず、計算負荷をかける手法などを考案してきました。この研究は現在もより高度化するため、継続中です。より現実に近い地下水流動を表現し、気候モデルと結合し、将来の気候変動予測の不確実性を減らすべく、日々研究を行っております。

母校である立命館大学の教員として戻って来られたのも、これまでに携わって頂いた方々のおかげです。この母校では、学生とともに新たな挑戦を研究でしていく予定です。また、教職員として、他の先生や事務員の方々と楽しい大学を作り上げていきたいと思っていますので、暖かく見守って頂けると幸いです。

立命館大学技術士会の活動内容の紹介とお願い

立命館大学技術士会は、平成21(2009)年12月に立命館大学出身者で技術士資格を保有する校友により設立され、その活動は15年目を迎え、現在の会員数は約170名となっています。

【活動内容の紹介】

- 立命館大学理工学部卒業生への技術士受験指導を実施。結果、建設部門、上下水道部門、機械部門、総合技術監理部門に、延べ46名の技術士を輩出。
また、技術士資格挑戦者への支援として、毎年3月より受験ガイダンスおよび受験講習会を4回実施。さらに、11月以降で口頭模擬試験を数回実施。
- 本学の教育活動に協力し、学園の発展に貢献。
環境都市工学科の授業担当講師として、技術士制度および技術士資格を取得するための過程について講義し、将来受験する技術士第二次試験について、実際に例題を取り上げて解説。
また、環境都市工学科の授業を活用し、1回生には『めざせ！技術士』、同3回生には『立命技術士懇談会』と題してJABEE制度や技術士の職務と役割について講義し、学生達に受験意欲の向上を図ると共に、卒業後の技術者としての社会活動のあり方や実社会での経験談を披露。
- 地域及び社会活動への技術的支援や未来の技術者への助言を発信。
その一環として令和4年1月に『土木技術者が語る未来』～今、伝えておきたい技術者の心～と題して電子書籍を発刊。立命館大学卒業生の土木技術者達の力作です。

【技術士会からのお願い】

★当技術士会の活動にご協力いただくためにも技術士資格取得者の方々は、当会に技術士資格の保有情報を下記事務局までお知らせください。

令和6(2024)年6月 立命館大学技術士会幹事会
事務局連絡先：企画・窓口担当 E-Mail：rits.kikaku.mado@gmail.com
立命館大学技術士会ホームページ：https://alumni.ritsumeijp/gijutsusikai/

み出しました。教育の現場の裏側を垣間見て、教授たちの日々の努力と献身がいかに大変かを身を持って理解しました。学生時代に抱いていた「なぜそんなに忙しいのか」という疑問が、今では「本当に忙しいんだ」という実感に変わりました。この「忙しさ」こそが研究に対しての情熱、教育に対しての信念、そして学生に対しての責任感です。先輩教授たちの背中を見て、私も成長していきたいと強く思います。

立命館の皆様、私がここに着任できたことを光栄に思います。また、立命館に着任する前の昨年十月に長男を出産し、仕事と子育ての両立を目指して歩んでいきたいと考えています。皆様のご指導のもと、一緒に立命館で挑戦し、成長していきたいと考えています。自分の運命を真に見つけ出すこと、いわゆる「立命すること」を楽しみにしています。どうぞ今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

建設会会員名簿発行・発送につきまして

現在、建設会事務局にて、2025年を目途に次回名簿の発行を予定しているところです。

これに伴い、学内幹事会におきましては、個人情報漏洩等が社会問題となっている状況等に鑑み、建設会における情報管理の厳格化とともに、名簿等の配布先の限定化が必要ではないかのご意見が出ております。つきましては、これまでの建設会の文化と時代の両者に適合した運用方法へと発展させるべく、名簿の取り扱いについて下記のとおりご提案いたします。

- 引き続き本会事務局管理により名簿作成は継続する。
- 名簿配布の対象範囲は本会会長・副会長、支部事務局、学系教員までとする。
- ②以外で、卒業生より個別に要望があった場合は指定の「依頼・誓約書」で申請いただき、学内幹事会で検討する。

上記に関しまして、ご意見等がございましたら建設会事務局までE-mail(kenstkai@st.ritsumeijp)またはFAX(077-561-2667)にてご連絡下さい。

事務局より

お知らせ

■会員登録データ

建設会会員名簿のもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」をご確認いただき、**修正や変更等がございましたら**建設会事務局までご連絡下さい。

また、「2023年度会員名簿[CD-R版](2023.12発行)」は、対象年度の会費を納入いただいている会員に送付させていただきました。2023年度分の会費をまだお納めでない方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(6,000円)を納入いただきますと、入金確認が出来次第、名簿をお送り致します。

▶名簿お取扱いについて

名簿は、会員の皆様の大切な個人情報に掲載しております。名簿をお持ちの会員様は、その保管およびお取扱いには十分ご注意ください(転売厳禁)。なお、ご不要になった名簿につきましては、お手数ですが焼却あるいはシュレッダー処分をしていただけますようお願い致します。

■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。

2024年度会費のご納入をお願い致します。

(年会費：3,000円)。

なお、銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキユウ)支店、当座0000884)。お振込の際、お手数ですがお名前の前に10桁の会員コードをご記入いただくか、お名前・会員コード・お振込日を下記アドレスまでご連絡下さい。

(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部都市システム系事務室内(担当:山元)
TEL:077-561-4911 FAX:077-561-2667

https://ritsumeijp/kenstkai/kenstkai@st.ritsumeijp
E-mail: kenstkai@st.ritsumeijp
会費払込郵便振替口座:02 大阪 01080-1-884

※8月9日～19日まで、大学一斉休暇となります。何とぞご了承下さい。